京都キリスト召団　聖霊降臨節特別集会

聖霊の力

――使徒行伝第16章――

（「活けるキリスト」152号１９７８年10月号より）

１９７８年5月21日
小池辰雄

聖霊のエクレシア（召団）　観念的なアポロ　パウロの按手　聖霊の実力　第二の宗教改革　信仰と祈り　苦難を通して　聖霊の愛

【使徒16】

1斯てパウロ、デルベとルステラとに到りたるに、視よ、彼処にテモテと云う弟子あり、その母は信者なるユダヤ人にて、父はギリシヤ人なり。2彼はルステラ、イコニオムの兄弟たちの中に令聞（よきこえ）ある者なり。3パウロかれの共に出立つことを欲したれば、その辺（あたり）に居るユダヤ人のために之に割礼を行えり、その父ギリシヤ人たるを凡ての人の知る故なり。4斯て町々を経ゆきて、エルサレムに居る使徒・長老たちの定め規（のり）を守らせんとて、之を人々に授けたり。5ここに諸教会はその信仰を堅うせられ、人員日毎にいや増せり。

6彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、7ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。9パウロ夜、幻影（まぼろし）を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。10パウロこの幻影を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴かんと為（せ）り。

11さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、12彼処よりピリピにゆく。ここはマケドニヤの中にて、この辺の第一の町にして殖民地なり、われら数日の間この町に留まる。13安息日に町の門を出でて祈場（いのりば）あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、14テアテラの町の紫布の商人（あきうど）にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。15彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯く強（し）いて我らを

留めたり。
16 われら祈場に往く途中、卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女、われらに遇う。17 彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高き神の僕にて汝らに救いの道を教うる者なり』18 幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり
19 然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20 之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21 我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』22 群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23 多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24 獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25 夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、26 俄に大いなる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。27 獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28 パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』29 獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30 之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』31 二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32 斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33 この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34 かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。

●聖霊のエクレシア（召団）

私たちの在り方というのは、量ではなくて質です。内村先生が

「一日一生」

と言われた。

「一日本当にキリストを生きれば、もう一生を生きたこと。一生をいい加減に生きれば、一日も生きていない」

というわけです。問題はこの質なんです。パウロは、

「およそ美わしきこと、およそ義しきこと、およそ善きことには敬意を表す」

となした。彼はみたまの人だから私心の無い「無者」となっていた。そういう人はみな敬

意を表する。私もみたまが来てからは仏教でも何でも、そこに真理のきらめきがあれば無条件に敬意を表する。真理は神のものですから。本当に自分が無くなってごらん、これくらい楽な、力強い世界はない。もう何とも言えない。大宇宙と気宇（きう）が一つになる。パウロが、

「キリストに本当にある者は一切をもつ、全世界も汝らのものである」

なんてな言い方をしている。これは本当にそうですね。キリスト者というのは宇宙的な気宇のものなんです。キリストは宇宙的なキリストでありますから。

ブルンナーが『教会の誤解』という本の中で、

「新約聖書に於ける教会というものは、キリストの体の他、何ものでもない。信者たちはお互いにキリストと聖霊にあずかっている者であって、他の何者でもない。エクレシアはキリストとその聖霊が生きていなければ、エクレシアとは言えない。エクレシアのもっているものは何かではなくて、彼である。キリストである。また聖霊である。啓示史の大きな救いの事実は、降誕節即ち受肉、次は受難の金曜日即ち贖罪、その次は復活節即ち復活の生命、それから五旬節即ち聖霊の注ぎ。その中で特に聖霊の注ぎということは、キリスト者にとって最も身近なことで、聖霊のあるところにだけ教会が、エクレシアがある。そうでないところには、何があってもエクレシアはない。」

ということを非常に断定的に確信をもって述べています。私は非常に愉快に読みました。あの本に共感できない人々はみたまを受けていないからでしょう。しかしブルンナーにしろ、バルトにしろ世界の大神学者ですが、晩年になって聖霊のことに気がついて、

「今まで聖霊を継子（ままこ）扱いにしていた。誠に今までの神学は、その点で大きな欠陥がある」

ということをブルンナーも言っている。バルトも、

「自分は使徒行伝の入口であって、まだ入っていない」

なんていうことを言っている。皆さん、御霊の権威を本当に賜れば何ものも恐れる必要がありません。

●観念的なアポロ

さて、使徒行伝18章の終りに書いてあるように、アレキサンデリヤ生れのユダヤ人で旧約聖書に通達しているアポロというのは、洗礼のヨハネやキリストについてはなかなか詳しい説教者でしたが、福音の中にはいなかった。これは一般の宣教者の型です。即ち、福音については語るのですが、福音の中からは語っていないのです。それなのにアポロもエペソでそういう説教をして、更にコリントに進んで行ったわけです。ところで、パウロはエペソにやって来た時に、ある信者たちに会って、

「お前たちは信者となった時に、聖霊を受けたか？」

と問いました。アポロが前に伝道したわけでしたが、彼等は言いました、

「いいえ。私たちは聖霊の有ることすら聞いていません」

パウロはたたみかけて、

「それじゃあ、何によってバプテスマを受けたのか？」

彼等は言いました、

「洗礼のヨハネのバプテスマです」

パウロは言いました、

「洗礼のヨハネが回心のバプテスマを授けて、自分に後れて来る者（即ちキリスト）**を信受すべきことを民に言ったんだ」**

と。彼等はこれを聞いて、パウロから主イエスの名によってバプテスマを受けました（行伝19・1～5）。

仏教では阿弥陀仏に帰入する祈りとして「南無阿弥陀仏」と称う称名がある。私は、

「南無キリスト」

と申しているわけですけれども。いつもそう言って祈っているわけではありません。心の中では「南無キリスト」を唱えますが。一般のキリスト者がこれを聞いたら、

「キリスト教と仏教を混合している」

といって反対したり非難したりするであろうことは覚悟の上です。言葉や表現というものは、同じ言葉や表現をつかっても、内容的にその時代その人によっていろいろちがうものであることは、言語史や哲学史が示している通りです。私はほかに

「本願」

という仏教の言葉も「聖意」と同義で自由に用いています。

名は直ちに実に接するわけです。況んやキリストの名には実があるから、みだりに唱うべきではない。よく祈りのつぎ目に、

「主さま、主さま」

とかよく入れる人がありますが、あれはいけません。言のあいだに「えーと」というのと同じことです。み霊にある祈り心で聖名を呼ぶことが極めて大切です。一般にはそうでないので、聖名を空名にしています。これは一種の冒瀆ですらあります。パウロやヨハネやペテロが聖名を呼ぶときには、み霊にあってでした。

●パウロの按手

それでパウロが聖名を呼んでバプテスマをほどこして彼らを按手したら、あざやかに聖霊が降り、異言を賜り、預言をするほどでした。これは驚くべき聖霊のバプテスマです。福音書のペテロは漁師みたいな、波みたいなペテロで、浮かんだり、沈んだり、わけがわからない。御霊の来た使徒行伝のペテロはこんなに違う。先程、今橋君の告白にもあったように、ペテロはガラリ変わってしまった。そういう事はもはや、いわゆる自分の信仰なんて言ってることじゃない。俄然上から来るところの能力が働く。

私も１９５０年の晩秋、大阿蘇で手島さんと祈祷会をした時に――手島さんに按手してもらったんじゃないのですが――俄然、異言が爆発しました。そして身体が躍動しました。それから今度は全身がしびれて坐ってなんかいられない。私はそういう経験をその後もいたしました。私にとって決定的なのは、

「**恵福(さいわい)なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり**」

の真義をみ霊にあって捉(つか)まえたときです。そのときは畳の上に平伏(ひれふ)してしまいました。あれが私には福音把握の鍵でした（第一巻『無者キリスト』参照）。聖霊の真理は、それを本当に体験せしめられなければわからないことです。お釈迦さんだってそう言ったでしょ、

「八万四千の法を説いたのだが、一つも説かなかった。お前たちが体験するまでは、この法の世界は本当はわからないのだ」

と。何でもそうです。自分で体験し、身につくまでは、すべて真理が観念です。真理が本当に身についたとき、それを道といいます。

さっき聖歌をうたった時に、

「十字架のもとに荷を降ろせば」

という句がありましたが、どんな荷物ですか。あれは自分そのもの、即ち「荷(に)」ではなく「身(み)」です。持っている荷物を降ろしたってだめです。自分白身がキリストの荷物なのですから。自分自身をキリストの中に降ろさなかったらダメ！　あなた方は歌う時に本当にこの境地に入って歌ってください。そうしたら「荷」と書いてあっても、これは「身」だという気持で歌う。

讃美歌でも「…し給わん」というのがよくありますが、「…し給う」というのが本当です。信仰の世界は想像や願望ではなく、断定であり、現在です。私や奥田君や今橋君やU君やH君など召団の代表の連中から聴いて、ただ陶酔してもだめです。

「よし、これを原動力にして私はやるぞ」

と、聖書を身読して何かおっ始めなくちゃ。エクレシア的共同作戦ですからね。共同戦線でやるのです。

聖書にもどります。パウロの唱名で御名の力が働きました。さきにも申しましたように、それからパウロは按手をしました。私は皆さんの背中に手を按(お)きます。ということは、

「主さま！　どうぞあなたの聖手をこの友人の頭の上に按いてください」

という気持でやっている。キリストの見えざる御手を頭に受けて、み霊にあって私はただ背中に手をおいてお手伝いしているだけ。キリスト抜きにして如何なることもできません。祈る時にもし隻手(せきしゅ)〔片手〕で祈るなら、その隻手にキリストの聖手を賜わるわけです。

「隻手の声」

と白隠が言いましたが、この隻手の声は、両手でパチンとやる〔拍手〕よりかもっと凄い声が響いている。キリストの聖手が来れば、相対的な存在である私たちに絶対的なものが臨

んで来て力を得るのです。

キリストが、

「父よ！」

とおっしゃるのは、いわゆるひげの生えた「お父さん」じゃない。「父」という言葉は暗号だから、物凄い、表現のできない実在者に信頼して、この中に自分をぶち込む。

「父よ」「アッバー」

という一言で、キリストはその中に入ってしまっている。後の祈りは直ちに聴かれるのです。

パウロの按手はすばらしい次元ですよ。それから、その後のところに、

「12かれの身より或は手拭あるいは前垂をとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり」

と。もうパウロの霊が物を通してでも展開しているわけです。手拭が何か呪わざをしたんじゃない。パウロを通してみ霊が伝わっただけです。

「キリストの裾に触れたらば、持病が直ちに治った」

と、福音書の中にもあるでしょ。

私は「聖霊の力」と題したけれども、マタイ伝の1章から黙示録の最後まで、みんな聖霊の力が働いているのです、この業も、あの言葉も。こういう聖霊の充満している新約聖書、即ち福音に新しく気がついてください。絶対に「意味」の世界じゃない。みんな御霊の力が働いているところの言葉であり、業です。だから聖書にはかなわない。いわゆる人間の思想であろうと、哲学だろうと、芸術であろうと、かなわない。どんな哲学も、人ひとりの魂を救うことはできません。ところが、この聖書の一言は、どれほどの人々を救うかわからない。それだけ質が違うんです。だから聖書は桁違いの本です。

●聖霊の実力

今度は使徒行伝16章を開いてみます。卜筮の霊に対するパウロの霊戦のところです。16章16節から、

16われら祈場に往く途中、卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女、われらに遇う。17彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高き神の僕にて汝らに救いの道を教うる者なり』18幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり

「聖名によりて命ず」

と言って、霊を出す。そのような霊出しということを、かつて私もかなりいたしました。その他、いろんな事がありました。霊界ではキリストの霊が最高であるという事をしっかり自覚してください。そして悪鬼はそのことを知っています。マルコ伝の5章だってそう

です。ペテロより先にイエスを神の子と言ったのは悪霊なんだから。ですからキリストが、

「我を現わすな」

と言われた。

「まだ自分が神の子であることを現わすな、時が早過ぎる」というようなわけです、伝道の妨げになるという。

とにかく、私は霊的素質の無い人間ですが、バカ正直ですから、聖書に書いてある不思議なことを疑いません。

「そんな事がありますか？」

でなくて、

「はい、参りました！」

と言って、聖書の現実に降参します。すると俄然、私の中に力が入ってくるのです。キリストが働いてくださるわけです。

19 **然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20 之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21 我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』**

なんてことを言って訴えたわけです。

22 **群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23 多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24 獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25 夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを**

足桎で動けないのに、しかし神様を讃美する。聖名の故に負いたる十字架という。

囚人ら聞きいたるに、26 俄に大いなる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、

これは霊震です。

その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。

キリストの墓場の大きな磐石が揺れ動きました。あれももみんな霊震で動かされた。単なる地震ではないと私は直覚いたします。

27 **獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28 パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』**

「逃げやしないよ、安心しなさい」というパウロの心です。

29 **獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30 之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』31 二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32 斯て神の言を**

獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。

力強く、パウロは恵みの言を伝えました。

33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。

即座に獄守が回心しました、家族と一緒に。ここでも人の思いをはるかに越えた聖霊の力が働き、キリストの福音は自らの力で進んで行きます。

「もしこの輩が黙せば石が叫ぶ」

とキリストは言われた。もし、我々キリスト者がみんな、原始の使徒たちのような信仰を捨ててしまって、

「もうキリスト教はだめだと言ったら石が叫ぶ」

という。また、

「アブラハムの裔を石より起こす」

と。皆さんは活ける石です。文字通り「リビングストーン」です。ペテロもそういう言葉を使っている。躓きの石、活ける石です。

コリント前書2章1節、

「1兄弟よ、われさきに汝らに到りしとき、神の証を伝うる言と知恵との優れたるを用いざりき。2イエス・キリスト即ち、十字架に釘けられ給いしままの事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり」

それほどにまでパウロは十字架を土台にしました。こう言って、それからパウロは何と言うかというと、

3我なんじらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、甚く戦けり。4わが談話も、宣教も、知恵の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり」（コリント前2・1～4）

人間パウロは懼れ戦くような者です。けれども、人間パウロの奥に、霊人パウロがいます。これが美しき言でも、知恵でもない、

「聖霊の能力に在って」

実存しているパウロです（ロマ15・13）。テサロニケ前書1章5節にも、

「能力と聖霊と大いなる確信とに由りて」

と書いてあります。コリント前書2・4には、

「御霊と能力との証明」

とあります。要するに、

「聖霊の力」

のことです。聖霊は力を持っています。このことは私もはっきり告白できます。その力は

人に対しては相手を救い上げる力。サタンに対してはやっつける力です。人を救い上げる力、敵をも愛する力、敵をも担い上げる力です。

「敵を愛せよ」

というのは、

「敵を担い上げてしまえ」

ということです。それはクリストフォロスのように。ある男が少年を担いで川を渡ろうとしたら、だんだん重くなる。しかし、重くなるにつれて、また力が出て来た。担がれた少年はキリストであった。そのキリストが逆に力を与えてくださった。その男はそれ以来、クリストフォロス〔キリストを背負う者〕と称われるようになりました。そういう伝説です。

何か知らんけれど、この御霊の世界に入って、この生命に入って、この御霊を戴いて、からだの中に宿していると、何をしましても、創造的な力も出て来る。耐え忍ぶ力も出て来る。知恵の力も出て来る。もう何とも言いようがない。相手を本当に救い上げる愛の力。そして愛は最大の力です。

だからコリント前書13章の、

「おおよそ事包みぬき、おおよそ事信じぬき、おおよそ事望みぬき、おおよそ事耐えぬき」（私訳）

というのは聖霊の愛です。そしてこの

「聖霊の愛」

ということを日本で初めて強調したのが手島さんです。更にコリント前書2章をみると。

「我らは奥義を解きて神の知恵を語る、即ち隠れたる知恵なり」（コリント前2・7）

また、

「御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり」（コリント前2・10）

「御霊のことは霊によりて弁うべき者なるが故なり」（コリント前2・14）

だから、聖霊を受けるまでは、実はいくら聞いても聞こえない。いくら見ても見えないということです。どうしても生まれつきの自分というものを一遍、無者にしなければ、即ちキリストの十字架でかたづけなければだめです。

「己を捨てろ、己に勝て！」

「困ったな」

なんて。できませんよ、そんな「己を捨てろ、己に勝て」なんて言ったって。本当に己に勝った人がいますか。キリストの他にいない。

「義人なし、一人だになし」

という。ある程度はいきますよ。だけれど、徹底的にではない。我々一人一人が、毎日毎日肉体は御飯を必要とするように、魂の世界もそうなんです。十字架の受けとり方が限り

なく深くなって行く。限りなく深くなって行くと、限りなく聖霊の世界が高くなる、深くなる、強くなる、熱くなる。そういうことです。それは正に聖霊で生きているからです。

「十字架、十字架」

と言いながら、聖霊が全然出て来ないところの十字架がたくさんある。ところが、十字架で吹っ飛ばされている事が本当にわかると、無になってしまう。無私のことです。虚無ではありません。

自分がなくなってしまうと、御霊が来てもう全身に満ちてくる。そういうわけで、ただ秘訣はこれだけです。こんな有難いものはないんですよ、十字架・聖霊は熱い強烈な愛です。相手を活かすものです。

●第二の宗教改革

コリント前書3章16節、

「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを」（コリント前3・16）

パウロは「神の御霊」と言いました。けれども、これは

「キリストの御霊」

と言って一向に差支えない。いわゆる神への直接的神秘主義になったらだめです。中世の神秘家たちがそれをやった。キリスト抜きに、パウロは「神」と言っているのではない。パウロが「神」と言うときは、その前面に「キリスト」が、その中には「聖霊」が共在している事態です。或はこういっても可い。「神様！」と言う時には、もうキリストはその中に入っている。いつも私が書くように、

「神・キリスト・聖霊・我」

という四重の〔内接円的〕関係を形成してくれる最も大切なものは聖霊なんです。そしてその中に入るには十字架という門があるから、キリストの中に入る。

「はばからずしてその至聖所に入る」

とヘブル書の中に書いてある。

「汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給う」

という。御霊の住み給うところに本当の生命がある。パウロはおもしろい事を言います。コリント前書4章13節、

「譏（そし）らるるとき、罵（ののし）らるるるとき、責められるるとき、我らは今に至るまで世の塵芥（ちりあくた）のごとく、万（よろず）の物の垢（あか）のごとく為（せ）られたり」（コリント前4・13）

この塵芥のごとき者に光がかかって塵が光る。光る塵なのです、私たちは。それから天界に虹がかかる。水滴は無色透明の無者である時に、太陽の光を受けて無限色に反映する。皆さん一人びとりはのっぴきならない光を放つんです、無者となると。その人はその人ら

しい光を放つ。無者となるというと、何だかみんな同じようになるか。そうじゃない。無者となると――神様は一人びとりを天下一品に造っておられる。人格というものは天下一品の一個体です。個というのは他のものと比較することのできない個が本当の人格体という――それはその人でなければできないものが御霊に於て現われてくる。

いいですか。それが中心になってその人の中で自在に、いろんな事に変光もしますよ。けれども、その人の持前の光というものはあるんだ、ありがたいです。それだから、それが大調和をなす。

百花繚乱として自然界は美わしい。花がみんなバラだったり、百合だったり、みな撫子（なでしこ）だったらどうにもならない。撫子は百合に向かって「撫子になれ」なんて、どの撫子も言ったことがない。みんなそれぞれ黙って神の栄光を現わして、自ら（おのずか）調和をなしています。

人間だけだね、本当にバカなのは。それぞれ人真似なんか一つもいらない。いわゆる類型的な必要はない。けれども、本当の人間性というのは、霊止（ひと）、神霊が止（とど）まるときです。それぞれお互に尊重しながら大きな調和をなす。大きなハーモニーとなる。平和であり、歓喜となる。わかりきった真理なんです。

国際関係もその通り。それぞれのイデオロギーでいいよ。しかしイデオロギー的真理には限界がある。その限界を弁（わきま）えないで、

「他の国もそうせよ」

と思ってみたりする。限界をわきまえるには、限界を越えた世界を持たなければだめなんです。イデオロギーを越えた世界を持たなければ、本当にイデオロギーを持つ資格がない。日本が全方位外交をやっている。本当の共栄をそれぞれの国に対してなすためには、超イデオロギーの人類愛を以てなすべきである。しからば、真の隣国愛を以て握手ができるわけです。国際関係でも自国の利益をのみ考えていたのではダメです。

何ごとも一番深いところでは愛だけが秘訣なのです。そのためには一番根源に於て神霊の止（とど）まっている霊止（ひと）となるに帰します。だから、第二の宗教改革は全世界のみたまのキリスト者一人ひとりの上にかかっています。我々も天界のパウロさん、ペテロさん、ヨハネさんを祈りの友として、天界の使徒たちと天地相応えて歩いて行かねばなりません。

コリント前書12章に来ますと、霊の賜物の事が書いてあって、

「御霊は同じだが賜物はいろいろだ」

「主は一つ、神は一つ、聖霊は一つ」

神・キリスト・聖霊は一つであるが、これを、心を一つにして受けとったところに、渾然たる力がはたらきます。そしてそのような有機体的共同作用を人体にたとえて彼は言っています。パウロという人は本当にすばらしい福音の構造を説いた人物です。コリント前書12章17節以下のところは、さきほども申した如く、国際関係だとか、社会構造に対しても正しい指針を与えるものです。大切な教育でも、政治でも、経済でも、どんな仕事や事

業でも、実はこの福音を各人が生活の原動力としていれば、健全な文化の展開がなされるはずです。

勿論、宗教は文化文明と直結するのではない。宗教は絶対次元だからこそ、文化のそれぞれの分野の専問の知識を正しく活用する原動力なのです。

●信仰と祈り

それでパウロは14章で異言の賜物のことも書いています。パウロという人は実に多面的な構造の人です。また彼は、

「我は霊をもって祈り、また心をもって祈らん」（コリント前14・15）

と第15節で言っています。パウロという人はどうしてこんなに自在なのか。本当に聖霊の世界に入って自分が無くなると、あの自在性が出てくる。皆さんの物事に対する判断の仕方、それに対する力の作用の仕方、これは深く入れば入るほど、

「キリストのみ霊は何とすばらしい事態であるか」

ということをだんだん体験するようになりますよ、是非とも。

ヨハネ第一書3・9に

「スペルマ」「神の種」

という言葉があります。これは聖霊のことです。種だから聖霊は先ず根を張り、そうして芽が出てくる。聖霊という種が、私たちの存在の中に深い根を張りました。根を張った聖霊なんて妙な言い方をするけれども、それが本当の常住の聖霊になるわけです。十字架のことは言外にふくまれています。十字架が深層意識の中にあるわけです。

いいですか。十字架が深層意識の中に来ていれば、根を張った聖霊はいよいよ本ものです。どういう事が来ても揺れません。人間だから揺れても、ダルマみたいにまた起き上がって決してひっくり返ってしまわない。また磁石のように必ず天極キリストを指す。人間ですからいろいろ揺れますよ。けれども、必ず天極を指す。

それでは、聖霊の内住はどうするんですか。祈りです。魂が呼吸している。キリストの霊を呼吸している世界。祈りの世界、祈り心、祈り魂。祈り魂になって、そうして日常生活に於ていろんな事に働く。そうでなかったら、聖霊なんて言ったって観念になります。

パウロさんもヨハネさんの書簡もそうだけれども、まぁ何と言ったって、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書のキリストの一切の在り方を見てください。キリストの言行の次元は絶対次元です。キリストの中に投身してみれば、みんな我々の力となって来ます。キリストは非常に激しい事をおっしゃって、どれも及第できない。これが聖霊の世界に入ると、実はその激しさが逆に私たちには本当の力となる。だから福音なんです。

「もはや人がこれを説明することを要しない」

とヨハネ書簡に書いてある。一番いい集会は本当に聖書を身読しながら、それが直ちに祈

りであるような集会。これが最高です。

「よし、それならやりましょう」

と、始めてくださいよ。そうしたらもう、

「二、三人わが名に於て身読するところに我は在るなり。御霊をもって在るなり」

ということです。それくらいのクリスチャンに我々はならなくては。もう今までの概念を突き破ってくださいよ。

「凄いなぁ、あいつらは」

なんて言われるようになってください。

「神のためには狂えるなり」

というような者に。

●苦難を通して

ペテロ前書4章12節、

[12]愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試煉を異なる事として怪しまず、[13]反ってキリストの苦難（くるしみ）に与（あずか）れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。[14]もし汝等キリストの名のために謗（そし）られなば幸福（さいわい）なり、栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり」（ペテロ前4・12～14）

これは本当の勝利の言葉です。キリストの御霊、神の御霊は私たちの中に留まって、霊止（ひと）となって、その時には、

「患難はいくらでもやって来い。反ってうれしくてしょうがない」

と。患難が来れば来るほど力が働くからです。聖霊が働くから。

「患難汝を玉にす」

なんていう言葉がありましたが、

「聖霊汝を火の玉とする」

です。まぁね、私みたいに70歳を越えてね、やっとこんなところに来たような馬鹿者の真似をしないように。もう後22年で20世紀はお終いだ。日本の将来は危いね。もういわゆる教育でもだめ。明治維新の志士たち、彼らの気魄に負けないところの聖霊の器が出て来なくては。それはあなた方一人びとりが第二の宗教改革を――現象面ではどうでもいいよ――質に於て第二の宗教改革を承っている一人びとりとなってください。そうして何十日でも祈ってごらん、自分に関わる事を。

象山が言ったように、

「二十を越えれば一国に、三十を越えれば天下に、四十を越えれば五世界に、関わりがある」

ということは、聖霊の人が本当に自覚するところのものです。関わりがある。神様はその人が知らないうちに何かやってなさる。法然とか親鸞とか日蓮とか道元とか、あの一流の坊さんたちは、仏教の世界でそういうような魂だった。キリスト教界にも、幾人かはそういう存在がありました。

どうぞそういうことで、器の大小はどうでもいい。質の問題なんです。原子力的な小ちゃなものが逆比例して、物凄い力を持っている。自分の祈りの力じゃない。本願の力なんです。聖霊の祈りの力なんです。間違えないでくださいよ。何と言おうが、本当に私は無いんです。そうすると物凄いものが来る。キリストの本願の祈りの力なんです。聖霊の祈りは、我々の中で五体をかけめぐり、また爆発してくる。

もうあなた方の中で何か今、肉体的に少しおかしい人はみんな直っているはずです。全身で受けとっていれば、もう直っているんです、全存在で。主さまは全的な人を、全的でぶつかっていく者を喜び給う。あの福音書を見てごらん。キリストにぶつかって、キリストが喜ばれるのは、みんな全的な在り方です。それが姦淫の女であろうと、何であろうと、みんなそうです。ところが、己を立てているような奴はみんなだめ、もうはっきりしている。この秘訣は説明できない。私はどんなに理解されなくても、「無者」を極道として進みます。

●聖霊の愛

コリント後書3章17～18節、

「主は即ち御霊なり、主の御霊のある所には自由あり」（コリント後3・17）

自由自在である。その自由自在は天の法則です。これは天の法則に従っている霊法です。

「御霊のあるところには霊法あり」

ということ。それと「自由あり」と同じことです。「自由」なんていうと、すぐ人間的な自由と思う。とんでもない。一般の人の言う自由なんていうものは、民主主義の自由なんていうのは次元が低い。

「我等はみな面帕（かおおおい）をはずされて主の栄光を映し、そして栄光より栄光にすすみ、主たる御霊にあって主と同じ姿に化するのである」（コリント後3・18）

同じくコリント後書4章5節、

「我らは己の事を宣（の）べず、ただキリスト・イエスの主たる事と我らがイエスのために汝らの僕（しもべ）たる事を宣ぶ」（コリント後4・5）

キリストが私たちの主で、私たちはまたみんなの僕である。僕なる者は本当の自由を持っている。僕というのは、キリストの霊が来ていれば、人を愛して、人を助けて、人を担って行くのを僕という。

「自主なる者」

と

「僕である」
という事とは一つなんです。間違わないでくださいよ。卑屈な意味でもって僕、婢女なんて言っているんじゃない。ルターが『キリスト者の自由』で書いている通りです。

「6光、暗より照り出でよと宣いし神は、イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために我らの心を照してくださった。7我等この宝を土の器に有っている。これ優れて大いなる能力の我等より出でずして神より（キリストより）出づることの顕れんためなり。8われらは四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、9責められるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、10常にイエスの死を（十字架の死を）我らの身に負う。これイエスの復活の生命の我らの身に御霊に於てあらわれん為なり」（コリント後4・6～10）

パウロさんの言葉の欠けたるを私は補いながら今読んだ。今や終末的な今世紀の末期です。本当の神の歴史の自覚をもって私たちは進んで行きたい。

「小さき群よ、神の国を給うはわが意である」

とキリストは言い給う。コリント後書11章を見ると、パウロの患難がこんなにあるじゃないですか。どうしてこんな患難を彼は突破できたんですか。

「聖霊の力のほか何ものでもない」

と、たたみかけて彼は言っている。やむを得ずして彼は語っている。

「彼らがキリストの役者なるか、われ狂える如く言う、我はなお勝っている。わが労は更におおく、獄に入れられしこと更に多く」（コリント後11・23）

と。パウロは狂える如く、バカのように言っている。

「誰か弱りて我弱らざらんや。誰か躓きて我燃えざらんや。もし誇るべくば、我が弱き所につきて誇らん」（コリント後11・29～30）

ただキリストだけを誇るという。

「我らは真理に逆いては能力なく、真理のためには能力あり」（コリント後13・8）

真理の実体、キリストのためには御霊に在って力があります。読んでいくと切りがないからやめますけれども、聖霊の力がこの御言葉の背後に、御言葉の中にいつも動いているということを忘れないでください。そうしたらば、福音書の読み方も、新約聖書の読み方も、ガラリ変わって来て、

「いやぁ、何か知らんけれども聖書は本当に大変な本だ」

と告白するに至るでしょう。私はただその事を皆さんにお勧めしたいだけです。